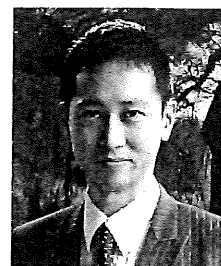


《巻頭言》

秋山兄弟と日露戦争

—「御国の為め」に—



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

今年(明治150年)ということで、昨秋から小説家の司馬遼太郎が著したベストセラー長編小説『坂の上の雲』(文藝春秋)を読み進めている。「まことに小さな国が、開花期をむかえようとしている」で始まる『坂の上の雲』は、明治維新を経て、清国、ロシアを撃ち破り、近代化への道を駆け上がっていく勃興期の明治日本を秋山好古・真之兄弟を通じて描き出した作品である。

兄の好古は「日本騎兵の父」として知られている。大日本帝国陸軍士官学校騎兵科に学んだ後、陸軍大学校でドイツ陸軍参謀将校のメッケルの薫陶を受け、フランスに渡って騎兵学を極める。その徹底した調査研究の甲斐あって、帰国後、「世界最弱」と笑われていた陸軍騎兵隊を鍛え上げ、その結果、日露戦争のクライマックスたる奉天会戦において「世界最強」を誇ったロシアのコサック騎兵を撃破し、勝利に導いた。

弟の真之は後に「天才参謀」と称され、連合艦隊司令長官の東郷平八郎をして「智謀沸くが如し」と言わしめるほどの知将であった。日露戦争では東郷に連合艦隊の作戦参謀を任じられ、日露戦争のターニングポイントとなった日本海海戦で「丁字戦法」を考案、バルチック艦隊を撃滅させた。

好古は真之より9歳年長だったが、真之の方が12年も早く病没している。1918年2月4日、海軍中将となって間もなく持病の虫垂炎が悪化、やがて腹膜炎

を併発した真之は、「不生不滅明けて鳥の三羽かな」と口唱した後、「般若心経」と「教育勅語」を交互に呟きながら息を引き取った。享年49歳、栄光の日本海海戦から13年後のことである。

それから4ヵ月後の6月15日、芝の青松寺にて追悼会が催された。その席で好古は「弟真之には兄として敢て他に誇るべき何物もない、が、しかしたゞ一事私から皆様に申上げて置きたいのは、弟真之はたとへ秒分の片時たりとも『御国の為め』といふ観念を捨てなかつた。二六時中此の観念が頭を去らなかつた。一此の事だけはハッキリと兄として言ひ得ると思ふ」と弔辞を述べた。この言葉は『坂の上の雲』にはなく、その種本とも言われている『秋山真之』(秋山真之会、1933年)に出てくる。

「御国の為め」に生涯を捧げた真之を兄の好古は誇らしく感じていたに違いない。「御国の為め」という表現は些か古めかしい印象を受けるが、これは言い換えると「世のため人のため」ということになろう。私的利益のみ追求しても、それによって得られるものは、ほんの些細な一時の満足感でしかない。真の幸福とは「世のため人のため」という利他的行為によって見出すことができるはずである。エゴイズムが蔓延する今日の日本……。明治の人々が見たら嘆き悲しむに違いない。